

目にかかったときの大きさは四十代半ばの脂の乗った研究者。話し方は優しいが切れ味鋭い頭脳の持ち主で、私はたちまち好きになつた。向こうも若い私に好



本人(東京)に南インドのタミル語を日本語の起源とする大野さんの説を聞いたときには、と

### 考古学

源説を支持する専門家は少ない。だが情熱的に研究に打ち込む姿勢はうらやましいほどだった。終生ただな

「ワール」(上田晶美著、一四七〇円)
九州よか店つまか店(加良風太・伊豆美沙子・日本経済新聞社編、一五七五円)

## 文 化

よりむしろ日本をよく知られる建築家だろう。ナチス・ドイツを逃れて来日し、桂離宮をはじめ日本の美について著作を数多く残した。三〇年代後半にイスタンブールに渡

の教員・卒業生が深くかわわっていたからだ。私の留学中にドイツを訪れた恩師も、まず「タウトの作品のある場所を案内してほしい」と言った。

海に残る旧日向別邸とよく似た色使い。赤やピンクで壁や天井が塗られていた。階段部分の壁には

は容易に理解できる。この村が属するブランドンブルク州は観光地として発展するため、まず州都

## 朽ちかけるタウトの家

故人が設計し暮らした旧東独の住宅、保存呼びかけ

田中 辰明



ベルリン郊外にダールヴィッツという村がある。ここにブルーノ・タウトが設計し、一九二六

赤とピンク、壁にガラスとコンタクトが取れた。実は庭が広く、そこに

「日本の美」発信に恩返し。ダールヴィッツの村は公共施設である駅舎でさえ、ガラスが割れたまま

は、一個人として親交を深めた。年齢は一回り上り出した記者だが、先生というより兄貴のような存在だ。新聞記者を辞めて出馬する決意を伝えた時は、あの優しい声で「出るなら負けるな」と励まされた。



色彩豊かなタウト邸の室内

### 幸せ者

を描写する訓練であった。人間をどう見るかということは見るほうの人間の年齢に

先生 健太
谷さんは教諭を辞